

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 19 日現在

機関番号：32632

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25770172

研究課題名(和文) 高程度を表す副詞の史的変遷に関する研究

研究課題名(英文) A study on the change of emphasis degree adverbs in Japanese

研究代表者

田和 真紀子(TAWA, Makiko)

清泉女子大学・文学部・准教授

研究者番号：30431696

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本語程度副詞の体系を解明する一環として、高程度を表す副詞に注目し、その変遷過程を研究した結果、以下の2点を明らかにした。(1) 中世後期から近世初頭にかけて、高程度を表す副詞は、発見的な程度副詞を主とする体系から評価的な程度副詞を主とする体系へと移り変わった。(2) 近世前期上方語では、引き続き評価的な程度副詞が使用されると同時に、新しい発見的な程度副詞が使用されるようになった。以上から、この時期に評価的な程度副詞と発見的な程度副詞の二系統が共存する今日の日本語程度副詞体系の基礎ができたことを指摘した。

研究成果の概要(英文)：As a part of elucidating the system of the degree adverb in Japanese, focusing on emphasis adverb and studying its transition process, the following two points were clarified. (1) From the late Middle Ages to the beginning of the modern era, the emphasis adverb changed from a system with a heuristic degree adverbial to an evaluative degree system with a predominant adverb. (2) In the Kansai dialect of the early modern period, new heuristic degree adverbs began to be used while continuing to use evaluation adverbs. At this time, I pointed out that the foundation of today's Japanese degree adverbial system where evaluation - level adverbs and heuristic degree adverbs co - existed.

研究分野：日本語史、副詞の史的研究

 キーワード：程度副詞 高程度を表す副詞 発見的な程度副詞 評価的な程度副詞 古代語近代語過渡期 程度副詞
体系 変遷

1. 研究開始当初の背景

(1) まず、副詞を取り巻く研究背景について述べたい。副詞は、日本語の品詞の中でも、分類と体系化が遅れているものの一つである。その理由は、副詞が他品詞から転成した語で成り立っており、形態的特徴および意味・機能が雑多であることから、形態と意味・機能のどちらの面からも体系的な分類・整理が難しいためである。

そのような副詞の中でも、比較的体系化が進んでいるのが、本研究で取り上げた程度副詞である。程度副詞は、形容詞類および形容詞類に似た性質を持つ状態を表す動詞を修飾し、程度を限定する副詞で、構文的特徴がはっきりしている。このような性質から、程度副詞は副詞の中でも比較的分類と体系化に関する研究が進み、中でも工藤浩(1983)「程度副詞をめぐって」は、程度副詞には程度性だけではなく評価性もあること、そして程度副詞における程度性と評価性の濃淡(強弱)は意味・機能の変化によって生じることを指摘し、程度副詞の分類に関して大きな影響を与えた。さらに、この工藤(1983)の示唆を受け、渡辺実(1990)「程度副詞の体系」は主に評価的側面から、仁田義雄(2002)『副詞的修飾表現の諸相』は主に程度的側面から程度副詞分類を行った。工藤(1983)・渡辺(1990)・仁田(2002)により、現代日本語程度副詞は、評価的側面と程度的側面の両面を持ち、程度副詞の種類によって、その評価性と程度性に偏りがあるという特徴が明らかになった。

(2) 以上の3研究の整理を行い、田和(2011)「程度副詞の評価性をめぐって」では、高程度を表す副詞に、程度限定しか行わない極度を表す程度副詞と、程度副詞と量副詞の間に存在する程度と量の両方を表す程度副詞が評価性の強い程度副詞(以下、評価的な程度副詞)のあることを確認した。

しかし、なぜ高程度を表す副詞に極度を表す程度副詞と評価的な程度副詞の2系統が存在するのかについては、現代語のみを調査対象とした共時的な研究だけで明らかにするには限界があった。

現代日本語における程度副詞体系の成立背景を明らかにするには、工藤(1983)が示唆していたもののこれまでの程度副詞分類の研究の流れの中で触れられてこなかった「第三の観点」、すなわち通時的な観点に基づき、意味・機能の変化と成立の過程を明らかにする必要がある。その基礎的な研究として、先の科学研究費による研究(課題番号: 23720226、課題名: 評価的な程度副詞の成立に関する基礎的研究)を行い、その中の田和(2012)「評価的な程度副詞の成立と展開」で、中世後期から近世初頭に、「イト」などの古代語で極度を表していた程度副詞が急速に衰退し、高程度を表す副詞が「アマリ」などの評価的な程度副詞に取って代わったことが明らかになった。

先の基礎的な研究で明らかにできたのは、日本語の高程度を表す副詞が評価的な程度副詞ばかりになったところまでであった。しかし、現代日本語の高程度を表す副詞は、極度を表す程度副詞と評価的な程度副詞の2系統である。以上から、近世初頭から現代までの間に、さらなる変化があったと推測され、この後の時代の高程度を表す副詞の体系の変遷過程を解明することで、現代日本語程度副詞体系の成立を解明することが可能になると考えられる。

2. 研究の目的

以上、「1. 研究開発当初の背景」で述べたことに基づき、本研究で明らかにすることは、現代日本語程度副詞体系における高程度を表す副詞の2系統が、いつ頃、どのような語の意味・機能の変化を経て成立したのか、ということである。

すなわち、高程度を表す副詞の2系統が成立した過程を解明するために、次の5点を明らかにすることを本研究の目的とした。

(1) 中世後期から近世初頭の高程度を表す副詞の共時的な体系はどのようなものであったか。(古代語近代語過渡期の共時態)

(2) 中世後期から近世初頭の高程度を表す副詞の体系を形成する副詞の成立背景にまつわる通時的な意味・機能の変遷過程の特徴とはどのようなものであったか。(古代語近代語過渡期の通時態)

(3)(1)の次の時代に当たる近世前期上方語における高程度を表す副詞の共時的な体系はどのようなものであったか。(初期近代語の共時態)

(4) 近世前期上方語における高程度を表す副詞の体系を形成する副詞の成立背景にまつわる通時的な意味・機能の変遷過程の特徴とはどのようなものであったか。(初期近代語の通時態)

(5)(1)~(4)を相対的に見て、古代語から近代語への過渡期の前後で程度副詞体系はどのように変遷したと言えるか。(高程度を表す副詞の体系変遷の実態)

3. 研究の方法

「2. 研究の目的」で示した5点それぞれについて、次のような方法で研究を進めた。

(1)については、中世後期から近世初頭の口語文体で書かれた資料(古狂言台本、キリシタン資料、抄物等)の調査を行い、先行研究および使用実態に即して、目視で高程度を表す副詞を判定した用例の収集・整理を行い、各語の意味・機能の記述を行なった。

(2) については、共時的な高程度を表す副詞の体系を形成する程度副詞の代表的なものとして「コトノホカ」「アマリ(ニ)」「ナカナカ」を取り上げ、その意味・機能の史的変遷を、(1)で用いた文献およびその前後の時代の文献から調査した用例を整理・記述することで体系の変遷との関わりを考察した。

(3) については、近世前期上方語の口語文体（もしくは口語文体に近い文体）で書かれている資料（西鶴浮世草子、近松世話浄瑠璃等）の調査を行い、先行研究および使用実態に即して、目視で高程度を表す副詞を判定した用例の収集・整理を行い、各語の意味・機能の記述を行なった。

(4) については、共時的な高程度を表す副詞の体系を形成する程度副詞の中から特徴的なものとして「タント」を取り上げ、その意味・機能の史的変遷を、(3)で用いた文献およびその前後の時代の文献から調査した用例を整理・記述することで体系の変遷との関わりを考察した。

(5) については、本研究と先の科研費による研究とを合わせて、全体を見直して、論文の加筆修正を行い、一書にまとめた。

4. 研究成果

「2. 研究の目的」、「3. 研究の方法」に記した5点において、次のような成果が得られた。

(1) については、中世後期から近世初頭の資料において、古代語から使用されてきた「極度を表す程度副詞」（後に「発見的な程度副詞」に改称）がほとんど使用されていないことを確認し、「評価的な程度副詞」が高程度表現の中心となっていたことを明らかにした。さらに、その高程度を表す評価的な程度副詞にも 主観範囲内最高 と 主観範囲超越 の2つのタイプがあることが明らかになった。

(2) については、「コトノホカ」の場合、かつて主観的・情意的な意味を持つ語として用いられていたが、古代語近代語過渡期においては、高程度を表す副詞として定着しており、古代語の『平家物語』を過渡期に当代の口語に訳した『天草版平家物語』では、程度副詞としての用法を回避するため、「モッテノホカ」を代わりに用いていたことが明らかになった。「アマリ(ニ)」については、過渡期の代表的な高程度を表す副詞であったことを、数量面・構文面から裏付けることができた。「ナカナカ」は次の時代の変化ともいえるのだが、過渡期は感動詞・応答詞として用いられていたものが、その評価的な性質から、評価的な程度副詞化したことを指摘した。これによって、評価的な程度副詞と話しての

主観との関係について理解が深まった。

(3) については、近世前期上方語の高程度を表す副詞の共時的な体系が「評価的な程度副詞」と新しい「発見的な程度副詞」による二系統となっていることを明らかにした。また、その中に「タント」や「ヨッポド」のように 多量 と 程度の甚だしさ の両方を表すタイプの高程度を表す副詞が存在することが明らかになった。

(4) については、(3)で見出された 多量 と 程度の甚だしさ の両方を表す高程度を表す副詞の実態を明らかにするため、「タント」の通時的な用法の変化を追った。その結果、ある一時期、特定の使用者（おもに遊里の女性）によって「タント」の 程度の甚だしさ を表す高程度用法が使用されていたことが明らかになった。

(5) では、先の科研費による研究の成果とともに、本研究の成果を一書にまとめた。本書の中では、以上の研究から、高程度を表す副詞の体系が、古代語から近代語への過渡期に大きく変化したことを指摘した。その結果、古代語から過渡期を経て近代語が成立していく過程において、程度副詞の高程度表現は、古代語：発見的（客観的）
過渡期：評価的（主観的）
近代語：評価的（主観的）と発見的（客観的）
という変遷を辿ったことを明らかにした。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計7件）

田和 真紀子、近世前期上方語における副詞「タント」の程度限定用法について、清泉女子大学紀要、査読有、64号、2017、17-31

田和 真紀子、近世前期上方語における高程度を表す副詞の諸相と体系 「発見的な程度副詞」の台頭、近代語研究、招待有、19集、2016、149-168

田和 真紀子、古語と口語のはざまにある『天草版平家物語』の語法に関する一考察 「コトノホカ」と「モッテノホカ」の用法をめぐって、清泉女子大学キリスト教文化研究所年報、査読有、24号、2016、89-109

田和 真紀子、中世後期から近世初頭における高程度を表す副詞の諸相 高程度を表す評価的な程度副詞を中心とした体系と主観化傾向、国語語彙史の研究、査読有、34集、2015、243-260

田和 真紀子、感動詞・応答詞と評価的な程度副詞との連続性について 大蔵虎明本における「ナカナカ」の分析から、『近代語研究』、招待有、18集、2015、25-42

(3)連携研究者 ()

研究者番号：

田和 真紀子、程度副詞体系の変遷-高程度を表す副詞を中心に-、日本語史の新視点と現代日本語、2014、67-81

(4)研究協力者 ()

田和 真紀子、狂言台本の「アマリ(二)」大蔵虎明本を中心に、『近代語研究』、招待有、17集、2013、64-77

〔学会発表〕(計1件)

田和 真紀子、近世前期上方語の高程度を表す副詞の諸相と体系、近代語学会、2017年12月13日、白百合女子大学(東京都調布市)

〔図書〕(計1件)

田和 真紀子、勉誠出版、日本語程度副詞体系の変遷、2017、272

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

田和 真紀子(TAWA, Makiko)
清泉女子大学・文学部・准教授
研究者番号：30431696

(2)研究分担者

()

研究者番号：